ペルソナ３なんとなく書いてみた

闇のロマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペルソナ３なんとなく書いてみた

【Ｎコード】
Ｎ１２０７Ｚ

【作者名】
闇のロマン

【あらすじ】
私の他作品、Ｆａｔｅなんとなく書いてみたの主人公、衛宮退を主人公としたペルソナ３のハーレムになるかも？な作品です。Ｆａｔｅもクロスしていきます。

ＴＳしようかな？Ｆａｔｅの方はそういう作品ですし。
まあそれは追追考えていきます。
原作主人公はハム子です。
また、この作品はＦａｔｅなんとなく書いてみたを読んで頂けない

と理解できないであろうと思われます。よろしければご一読ください。

第一話（前書き）

またやっちまったけど
後悔はない。
自由意思は・・・俺にある！

第一話

俺、衛宮退は電車に乗っていた。
いつの間にか、理由は定かではないが乗っていた。
ポーンと機内放送の音がなる。

「次は～巌戸台、巌戸台――――」

巌戸台、聞いたことのない地名だった。
いや、知らないだけで実際存在していたのかもしれないが、そんなことはどうでもいい。

何故俺はそんな所行きの電車に乗っているんだ。
訳が分からない。どうなっている？
俺はこうなった理由は無いものかと思考を巡らせる。

『退！とうとう第二魔法に到達したかもしれないわ！実験に付き合ってちょうだい！』

『・・・はぁ？』

そう、俺は結局凛に押し切られて実験に付き合わされたんだ。

そして、何かされた直後意識を失って・・・。
現状に至る・・・と。
成程、つまりこれはそういうことかと俺は納得する。
「凛のいつものうっかりか・・・全くあれはもはや呪いだな」
俺は思わず深い溜息を吐いた。
「あの、そんなに深く溜息を吐いてどうしたんですか・・・？」
その時、あまりに深い溜息だったのかやや心配そうな声色で声を掛けられた。
声の主は隣に座っていた少女だった。黒い学生服だろうか？を身に纏い、茶色の髪を何個かのピンで止めた赤い瞳を持つ少女だ。
いけないな、見ず知らずの他人に心配をかけてしまうとは・・・。
「すまない、友人のせいで少々面倒な目にあってしまってね。つい溜息なぞ吐いてしまった。心配してくれてありがとう」
「いえ、大丈夫なら良かったです。あ、私、主人（ぬしびと）　公子（きみこ）って言います。貴方は？」
「俺は衛宮退。そろそろ三十路のただのおっさんだよ」
言っておくが無職ではない。
ちゃんと死徒討伐とか要人の護衛などやっている。
稀に式や美樹ちゃんなんかも手伝ってくれる。
式は護衛で、美樹ちゃんは捜索系の仕事で一役買ってくれている。

「衛宮さん、ですか。よろしくお願いします！年齢よりずっとお若いんですね」

「宜しくお願いします。見たところ学生だが礼儀正しいな。そういう娘は俺の周りには少なくてな。何だか新鮮だよ」

そう、白は家族だからいいとして、椎名・綾子ちゃん・式・ランサーとまだまだいるが割りと大人しめの娘というのは周りにいなかった。

明朗快活、猪突猛進なヤツが多かったため、こういう娘は新鮮だ。

それに若いって・・・嬉しいことを言ってくれる。

刹那、またポーンと音が鳴る。

「あ、着きましたね。じゃあ私巌戸台で降りますんで・・・また会えるといいですね！」

そういって主人さんは降りていった。

とりあえず俺も巌戸台で降りてみることにしよう。

無論券など持っている訳がないので、券を紛失したと偽って券を購入する羽目になった。

そして即改札で使うという・・・何だか虚しかった。

改札口に券を入れ、とりあえず駅から出ようとした刹那。

音が消えた。

電気の付いていたものも何もかも、見てみるとどうやら俺の携帯電話や腕時計も止まっているようだった。故障かとも思ったがそれにしては出来すぎている。
何が起こっているんだ？
とにかく事態を把握しようと駅を出ると、そこには・・・まるで棺桶のようなオブジェがいくつも置かれていた。
それに何かの気配がする。
殺気も感じる。それも複数、だが雰囲気的にはそう強くはない。
だが油断は禁物だ。俺は何故か手にしていた刀を抜き、辺りを警戒する。
そして、殺気が濃厚なものとなる。

「・・・来るか！」

正面に何体だろうか、何かが躍り出てくる。
それは・・・。

黒い、形容し難い造形の化け物だった。

「…！？　何だこいつは、あまり脅威になるほどの力はないようだが…多いな、幾らなんでも」

俺の周りにはうぞうぞと沢山の黒い影、これだけ多いと正直萎える。
さすがに気持ちも悪い。
片手で相手するにはキツイかもな、この数は。
まあ、無い物ねだりをしても仕方がない。

「伊達に聖杯戦争を生き延びてないってことを教えてやるよ。お前らに言葉が理解できてるかしらないがな」

刹那、多くの影の中から数体が襲いかかってくる。
しかしやはりというべきか連携が取れておらず、バラバラに襲いかかってくる影を順番に両断していく。
だが何十体か倒したところで影らも学習したのか、何体か同時に連携をとって襲ってくるようになる。
正面から一体が来る。そしてその影に隠れてもう一体が俺の足に纏わり付いてくる。

「糞が…気持ち悪いんだよ！」

俺は一度正面から来た方の影を刀で受け止め、足に纏わり付いた影を足に纏わり付かせたまま思い切り持ち上げ、もう一体と一緒に思い切り踵落としを食らわせ地面に叩きつける。
俺が二体を始末したと同時に影の群れの中から氷や炎、風に雷――五属性の魔術だろうか？――が飛来してくる。それらを俺は体をずらし、時には屈み、やり過ごしていく。

「…キリがないな全く」

キリがない。全くその通り、地道に刀や体術で倒しているが全く減らない。
何故これほどまでに多いのだろうか？厄日か？厄日なのか？
…厄日だろうな。凛ちゃんに変な所に飛ばされるくらいだし。

しかし、どうしたものか。
俺の体力に余裕はあるが無限じゃない。
何か打開策が欲しい。こんなときに白の投影魔術や凛のガンドとかが羨ましく感じる。

刹那、意識を飛ばしてしまっていたために俺は影が背後から来ていることに気が付かなかった。

「…！？　しまっ…ぐぁ！！」

俺は見事に地面に組み伏せられてしまう。
何体もの影も寄ってきて俺を拘束する。
何て…無様、戦闘中に油断してこの様なんて馬鹿か！

徐々に徐々に死が近づいてくるのを感じる。
身体は全く動かせない。

どうする？諦めるのか？

そんな訳がない。

まだ白の、妹の花嫁衣装すら見てないんだぞ。
我が妹や、椎名、凛。あの娘らの幸せを見届けるまでは死ねるか！
兄ちゃんを嘗めんなよ！

「うおおおおおおおおお！！」

刹那、脳裏に言葉が浮かぶ。

ぺ……ナ。

ぺ……ソナ。

『さあ、私を呼べ。深愛なる我があ…夫よ』

何か変なの聞こえた！

「ペルソナ！」

そう脳裏に響いた言葉を叫ぶ。
すると突如目の前に現れたカードが弾け、青い光が俺を包む、と同時に俺を拘束していた影が一気に消し飛んだ。
何が起こったのかと周りを見ると、周辺にうぞうぞ蠢いていた筈の大量の影の姿も消えていた。

「一体何が…」

辺りを見回す…！？

視界の端に何かツンツンした白髪と赤い外装が見えた…。
そんな訳…ないはずだ。
だって此処が俺が知らなかっただけで存在していたとしても冬木市にいる筈の赤い弓兵がここにいるはずないじゃないか！

「ふむ、やはり退と私はどこまでも深く繋がっているようだな。君の召喚に従い参上した」

そこには間違いなく赤い弓兵、クラスはアーチャー。
聖杯戦争の参加者の、真名は『エミヤ　シロ』がニコニコ笑いながら立っていた。

つまり…どういうことなんだ？

第一話（後書き）

はい、というわけで主人公は聖杯戦争から数年後の衛宮退三十路前さんです。
相変わらず片腕なし。一話では散々でしたが実際はもっと強い、強くなっています。
ではよろしくお願いします。

第二話（前書き）

ただでさえ崩壊しているアーチャーさらに崩壊

第二話

結局、目の前にいるシロ、いやアーチャーは幻覚ではなかった…。
アーチャーは相変わらず変た…ブラコンのようだった。
慕われているのは純粋に嬉しくはあるのだが。

「それで、どういうことなんだ。なんで俺は気がついたら電車に乗ってたんだ」

「ふむ、まあ、第二魔法を実現した…のだろうな、恐らく」

「成功したばっかりに俺は平行世界なんぞに放り出されたのか、というか凛は何してくれてるんだ。第二魔法を了承なしにやる奴があるか」

「ふっ、甘いな退」

俺が凛の行為に頭を抱えていると、アーチャーはフッと笑う。
それはそんなこともわからないのかと俺を嘲笑っているかの如くだ。

「凛も本当に実験のつもりで事を成すつもりはなかったのだろう、つまりは…ただの『うっかり』だ」

「…ですよねー」

わかってはいたが遠坂の家はとんでもない呪いを残してくれたものだ。
というかあの子のうっかりは魔法にすら届いてしまうのか。

なんて恐ろしい…ゲイボルク以上の呪いに違いない。

「しかしどうするか、こちらに戸籍があるかも疑わしいが…家もないし」

「そうだな、戸籍の方は私が調べておこう。霊体化すれば潜入して調べるくらい造作もない」

それは犯罪だろうアーチャー。
だが俺が直接危機に言って万が一戸籍がなければ…俺は色々とヤバイことになる可能性がある。
ここはアーチャーに任せるほかあるまい。
俺はアーチャーに出来るだけ早めに頼むようお願いする。
アーチャーは了解し、頷くと姿を消した。

「…あ、なんでいるのか聞き忘れてた」

時既に遅し、である。
だが正直アーチャーが何故いるかなど心底どうでもいいので放置しておくことにした。
とりあえずは寝床を探さなければ。
見たところ街並みは日本だし、探せばどこか滞在出来る場所があるだろう。

…がしかしそう上手くはいかないのが世の常というもので…。
俺はどこかの神社の前でベンチに座って俯き冷たい風に晒されながら黄昏ていた。

「畜生…どこもなかった、何で今日に限ってどこも改装中なんだ。
世界の修正力とでも言うつもりかこの野郎め…」

「わふ？」

…わふ？
俯いていた顔を上げる。
そこには白い犬が一匹。
可愛らしいが理性を感じさせる精悍な顔付きをしている。

「お前、飼い主はどうした？」

俺は返事は期待せず、犬の前に屈んで頭を撫でながら問うた。

「わん！」

…返事が帰ってくるとは思わなかったな。
この神社の神主さんか何かが飼い主だろうか。
それにしては神社内に気配がない。寝ていたとしても少なからず気配はするはずだし、別に家があるのならこの犬はそちらに連れられているはずだ。

「もしかして、お前…一人か？」

「くぅん…」

俺がそう聞くと、犬は悲しげに鳴いた。
そうか、こいつは一人なのか。
きっと何故ここにいるのかは分からないが、何か思うところがあってここにいるのだろう。

しかし、この反応もしかして。
「お前。俺の言ってることがわかるのか？」
「わんっ！」
犬は元気よく一声鳴く。
本当に分かっているようだった。
もしかしてこの世界の犬は皆こうなのだろうか…。
驚くべき世界だな…。
「寒いが今日はこのベンチで寝るしかないか…。ああ、そうだ…」
俺は犬の方へ目を向ける。
犬はどうしたのかと首を傾げた。
「今日だけでいい。お前を抱いて寝かせてくれないか？寒くてな」
俺はそんなお願いをした自分自身に苦笑しつつ犬に向かって言った。
犬はそんな俺に間髪いれずに飛びかかってくる。
俺はそんな犬の行為に一瞬驚いたが、何とか受け止める。
「良いってことか？」
「わんっ、わんっ！」
犬は肯定するように二度吠えた。
俺は犬をぎゅっと抱きしめる。

暖かい。この世界に来て初めて感じる温もりがまさか犬だとは思わなかった。
求めてやまなかった温もり安心してしまったのか目蓋が重くなってくる。

「…おやすみ、犬」

意識が落ちる。

おまけ

「戻ったぞ退…ってこ、これは！？」

「くー、くー」「わふっ、くぅーん」

「もふもふと退の寝顔のツーショット！これは…固有結界に保存しないと！はあ…はあ…あ、鼻血」

「う、ん…うるさいぞランサー…静かに寝かせろ…グー」

「…！？　寝言があたしじゃなくてあんな犬だなんて…絶望した、けどそれとこれとは別ね」

Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ　ｏｆ　ｍｙ　ｂｒｏｔｈｅｒ！！！！

第二話（後書き）

アチャ子は変態。
ここではこれはジャスティス！

第三話　4月7日（前書き）

少し自分で書いてて混乱しちゃったのでおかしな部分があるかもです。
まあスルーしていただけると助かります。

第三話　4月7日

「まず結論から言おう、戸籍はあった。何故か退は元々この世界にいるようになっているのか・・・。良い方向に修正力でも働いたのか」

朝起きると、ベンチの前は血だらけ。
目の前にいるアーチャーは鼻にティッシュを入れていた。
美人が台無し過ぎる。

「とりあえず第一の問題は突破出来たってことか。後は・・・住居と仕事をどうするかだな」

財布に幾らか金はあるが長持ちはすまい。
となると・・・住居を得ることが出来て、尚且つそれが仕事にもなるもの。
つまり、住み込みで出来る仕事を見つけられるのがベストだろう。

「とはいえ・・・だ。」

そんなもの直ぐに思い当たるものではなかった。
とりあえず街を散策してみることにし、一夜を共にした犬に別れを告げ、俺は神社を後にした。

数十分程歩いたところで俺は気になることがあり、路地裏へ入り隣

で霊体化して付いてきているアーチャーに声を掛ける。

「アーチャー、少しいいか？　お前呼ばれたのはいいが魔力はどうした。まさか昨日お前を読んでから妙に魔力を吸われている気がするのは俺の気のせいか？」

「それは気のせいではない。退に召喚されている間はパスが繋がっているのだろう。つまりこのまま私を召喚したままなのはあまり得策ではない。」

そう言ってアーチャーは霊体化を解く。

そう、俺はあまり魔力量がない。だが身体強化にその少ない魔力を使っているためアーチャーを使役しつつ戦うなんて出来ないだろう。戦わなければ何日か召喚したままでいられるだろうが。

「しかし、もう一度召喚出来る保証が無い以上アーチャーを消すのは少しな…」

「そう言ってもらえるのは猛烈に嬉しいのだが問題ない。」

そう言ってアーチャーは目を静かに閉じる。

するとアーチャーが光に包まれて消え、一枚のカードが残った。

「き、消えた？」

アーチャーが消えたことに胆を冷やすが、とにかく落ちているカードを拾う。

そこにはアーチャーの姿が書かれている。

『どうだ？退』

「これは…念話か」

俺の頭にアーチャーの声が響きわたる。

『どうやら退が魔力消費を最低限に出来るようにカード化出来るようになっているようだ。自由に動けず多少不便だがマスターの負担を和らげるためだ。受け入れよう』

「アーチャー…」

『その代わり今夜一緒に寝「よし職探しするかー」いけずだな退』

「あった、あったよ住み込みの仕事」

それはとある建物の壁に貼ってあった張り紙に記載されていた。

内容は月光館学園――昨日出会った主人さんの通うらしい学校――の寮母、または寮父を募集しているものだった。しかも面接のみ。俺はこのチャンス逃してなるものかと思った。毎日寮生に食事を作り、寮の掃除をしたりしなければならないが、そういうのは大得意だ。

何せ白がまだ未熟だった頃ずっと家事をして、白に家事を教えたのも俺なのだ。

これは・・・行くしかない。

どうやら期限も迫っているらしい。

「期限は・・・四月七日・・・今日じゃないか！」

『ふむ、相当ギリギリだな』

だ、大丈夫だよな？

もうこれ採用決まっちゃいそうなレベルの時期なのでは・・・。

いや、希望は最後まで捨ててはダメだと、俺は早速俺はチラシに書かれている番号に電話を掛けた。

月光館学園の一室で面接を受けることになった。

結果は・・・面接もそこそこに即採用だった。そんなんでいいのか月光館学園。

面接相手の理事長――幾月修司さん――の話では面接を受けに来ていた人たちが、全員無気力症なる病気にかかってしまい使い物にならなくなってしまったのだそうだ。無気力症というのはよくわからないが、住み込みの仕事を得られたのは僥倖だった。

「えっと…今日の十九時に寮へ行って早速仕事…か。なんか急過ぎるしあまりにスムーズに事が進み過ぎていて裏がありそうで怖いが…背に腹は変えられんしな」

「まさか寮母、父募集がこんな形で実を結ぶとはね…」

月光館学園学生寮の最上階の一室、そこに幾月修司はいた。
幾月は部屋に設置されているモニターを見ていた。
そこに写っているのは刀を振るい猛然と影――シャドウ――を蹴散らす退の姿だ。

「ふむ、大量のシャドウ反応が出ては消えてを繰り返していたから桐条くんに調査して貰ったんだけど、まさかこんな存在を見つけることができるとはね」

映像は途中で幾月のいう桐条くんがシャドウに遭遇してしまった為に途中で切れてしまっているが、退の実力を知るには十分過ぎた。

「ふふふ、まさかこの青年が募集に食いついてくるとは思わなかったよ。しかしそのおかげでこんな使えそうなコマを労せず呼び込むことが出来た…。彼を計画に入れれば更に私の計画が成就する確立は上がる…くっくっ、はははははは」

「さて、そろそろ十八時半か。初めて行く場所だし早めに行くとしよう」

『ああ』

俺は幾月さんから面接の際に貰った地図を片手に学生寮へ向かう。
初めての街は地図があってもかなり大変だった。

しかし、俺は丁度一九時頃に学生寮の前に付いていた。
俺はこれからお世話していく子達に会うのに少し緊張しつつ服を少し整える。
「…よし！」
そして一息入れ、俺は寮の扉を開けた。

第三話　4月7日（後書き）

退、寮父になる。

幾月、怪しげ。

今回はこんなところです。

第四話　４月７日Ｐａｒｔ２（前書き）

一ヶ月振りです、
年末年始忙しくて全く更新出来なんだ。

第四話　４月７日Ｐａｒｔ２

寮の中に入ると、無数の視線が俺を貫いた。
俺がその視線に軽く耐えると、頭の中に電波が受信された。
勇気が上がった！
「…うん？」
過ぎ去った電波に俺は一瞬疑問を抱いたが、今は大事な局面であることを思い出し直ぐに電波の事を捨て置く。
とりあえず視線の主達を見る。
そこには何人かの女性がいた。
というか一人を覗いて女性しかいなかった。
その一人というのは俺の寮父の面接を請け負ってくれた月光館学園理事長、幾月修司さん。
しかし彼から女子寮とは聞いていない。
なにより寮の表にも女子寮という明記はされていなかった。
となると女子寮というわけではなく単純に女子しかいないのだろう。
その彼女らの中に一人見知った顔を見つけた。
先日電車の中で会った少女、主人公子だ。
彼女もこちらが誰か分かったのか、何故俺がここにいるのかと目をまん丸くして驚いている。
その歳相応というか何というか、可愛らしい反応が俺には微笑ましかった。

「やあやあ衛宮君、中々に早い出勤だね。感心感心」

「ははは、遅刻して第一印象が時間にルーズというのは正直まずいですからね」

「確かにそうだ、第一印象は何事も重要だからね。まあ掛けて」

理事長から座るよう促され空いているソファ――白い短髪のスポーティな少女――の横に座る。

少女は男に慣れていないのか知らないが、俺が隣に座るとびくっと小動物の如く少し肩を震わせる。

しかし本人はそれを隠すかの様に何食わぬ顔をしている。

…顔を少し赤らめている時点で意味ないが。

「みんなにはまだ言っていなかったね。本日付でこの寮の寮父として住み込みで働くことになった衛宮退君だ」

理事長に紹介され、俺はソファから立ち上がり全員に一礼し、自己紹介を始める。

「ご紹介に預りました衛宮退です。家事全般が得意…じゃなかったらこんな仕事しないよな。剣術をやっていたので腕にはそこそこ自信があります。勉強もそれなりには出来るので力になれると思います。これからよろしくお願いします」

自己紹介をし終わり、俺はソファに座る。

彼女らの反応は三者三様だった。

俺の正面に座る主人さんは何だか安堵したように笑っていた。

そういえば彼女は転校生というやつだったな。
少し話した程度とはいえ知り合いである俺が来たことに安心感を抱いてくれたのだろうか？
それならば嬉しい限りだ。

主人さんの隣のピンクのカーディガンを身に纏う勝気そうな少女は何か思うところがあるのか、何とも言えない、しかしこちらを警戒しているような雰囲気だ。
まあ初対面の男を大なり小なり警戒するのは仕方ないだろう。
だがしかし、それなりに話せる位には打ち解けたいものだ。

そしてそのピンク少女の正面に座る赤髪の何処ぞのお嬢様のような少女だ。
彼女はこちらを品定めするような視線を送ってきた後、顎に手を当て何やら思案しているようだ。
彼女は何というか…大人びている子だ。

そして俺の隣の白髪少女。
彼女は緊張した面持ちでこちらの様子を飽く迄様相はクールに、こちらを見ていた。
俺が視線を合わせると途端に顔を赤くして俯いてしまう。
…面白い。
かなり男慣れしていないんだと窺える反応だ。
こんなで学校とか大丈夫なのだろうか。

そして理事長…はどうでもいいか。
そんな俺の心中を知ってか知らずか理事長は話を進めていく。

「それじゃあ君たちも衛宮君に自己紹介をしてあげてくれ。これから世話になるんだからね」

理事長にそう言われ、まず赤髪の娘がソファから腰を上げ、自己紹介を始めた。

「初めまして、私は桐条美鶴。月光館学園高等部三年生です。よろしくお願いします」

そう言って赤髪の娘――桐条美鶴――は一礼しソファに座る。
立ち居振る舞いが優雅な娘だ。
桐条と言えば確か月光館学園の出資団体だったはず。
成程、やはり御令嬢だったか。

次に立ち上がったのは白髪の娘だ。

「あたしは真田　有紀（あき）。美鶴…桐条と同じ高等部三年です。えっと…よ、よろしくお願いします」

白髪の娘――真田有紀――は顔を赤らめ座る。
何だか見てて微笑ましい娘だ。
しかし容姿はどちらかというと可愛らしいのだが男前な感じで、男にも女にも人気がありそうだ。

次はピンクの娘だ。

「岳羽ゆかりです。私は桐条先輩達より一つしたの二年生です。よろしくお願いします」

ピンクの娘――岳羽ゆかり――は今だ警戒しているようで、表情が固い。
残念だが時間を掛けてゆっくり打ち解けていかなければならないだ

ろう。

そして最後は主人さんだ。

「先日振りです！正直転校したてで不安だったんですけど衛宮さんが寮父さんだなんて何だか安心しました。これからよろしくお願いします！」

主人さんは電車内で会ったときから思っていたが、元気な娘だ。
それになんというか、彼女からは無限の可能性を感じる。
こう…神社とかで学力上げてそうだ。
何でそう思ったかは知らない…なんとなくだ。

とにかく、俺はこれからこの世界のこの場所で生活することになるのだ。
何時元の世界に戻れるかは分からないが、我が家に帰れるその時まで頑張っていきたいと思う。

ただ一つ確実なのは、帰った暁には間違いなく凛に制裁を与えるつもりだ。

極上の…な。

第四話　４月７日Ｐａｒｔ２（後書き）

久しぶり過ぎて書いてて違和感が…うごご

第四話　４月７日Ｐａｒｔ３（前書き）

書いてて楽しかったけど自分で何書いてんのかいまいちわかんなかったぜ！

第四話　4月7日Ｐａｒｔ3

はじめに…今までこの作品は退の視点で話を書いていましたがちと面ど…Ｆａｔｅ小説の方が三人称なのでそっちに統一しようと思います。どうも自分の中で違和感を覚えてしまったので。いままでの分は修正は入れません。ではどうぞ。

「そうだ、皆もう食事は取りましたか？」

自己紹介の後、ある事を思い立った退はこの場にいる全員に問うた。皆その質問に疑問を抱いているようだが皆、取っていないと答えた。その答えに退は少しホッとした後、提案する。

「今日は顔合わせだけの筈だったんだが俺はご飯を食べていないんですよ。それで食べていない人がいるならついでと言ってはなんですけど御馳走…というのは語弊があるか。初仕事をさせていただこうと思いまして」

その退の言葉に成程、と幾月は納得し俯き思案顔になる。

そして数秒し幾月は顔を上げた。

「じゃあせっかくだし僕は御馳走になろうかなあ。家に帰っても一人で冷たい食事を取るだけだからね。ははははは！」

幾月そう言って実に爽やかに笑う。
幾月以外の者は何とも言えない表情でガン無視だ。
しかし公子だけは違った。
公子は「うーん…」と何かを考えると、至って真剣な面持ちで口を開いた。

「理事長」

「うん？」

「自虐ネタは諸刃の剣ですよ？」

「…あ、はい、ごめんなさい」

退は悟った。
彼女は軽く天然な上に、わりと容赦がないと…。

結局皆、退の申し出を受けることとなった。
しかしやはりというべきか材料はなかったので、退と有紀で買出しに行くことになった。
何故連れが有紀なのか？

なんてことはない。
買出しに行く際に退が一番近くにいた彼女に協力を仰いだというだけ。
実に単純な理由だ。
決して好みのタイプだったとかそういう浮いた理由ではない、断じて。

「すみません。買出しに付き合わせてしまって」
寮を出て数分。
退が有紀にそう謝罪すると、突然声を掛けられた有紀はやはりビクっと驚いた後、態度だけは堂々と応対する。
「い、いえ…これからお世話になるんですからこれくらいは…！ぐぅ…舌噛んだ…！」
「おい大丈夫か？舌見せてみろ」
有紀は涙目になりつつ控えめにチロリと舌を出す。
舌を見る限り傷も付いていないようだし大丈夫そうだった。
退はふぅ…と溜息を吐く。
男に慣れていないだろうということは分かっていたが、ここまで緊張する程とは思わなかったのだ。
「真田さん」
「…ひゃい？」
退の言葉に有紀は依然舌を出したまま返事をする。
退はとりあえずそれについてツッコミを入れる。
「とりあえず舌はもう仕舞いなさい」
「あ、はい。衛宮さんも年上なんですから敬語は結構です」

「そうかい？じゃあ御言葉に甘えて…真田さんはどうも男に慣れていないようだな」

その言葉に有紀は思うところがあるどころか図星なのか、男前な外見に反して子犬の様に縮こまってしまう。

そしてポツポツと話始める。

「実はあたしは女子ボクシング部の部長をやってまして…自慢じゃないですけど腕には自信があるし、大会連覇も果たしているんですが…」

「へえ？凄いじゃないか、頑張ってるんだな。…だがその言い様から察するにそれが君が男を相手にするのが苦手な理由なのかい？」

有紀は退の意見に対し首肯する。

そして退は続きを促す。

「実はそのせいでその…女子生徒にモテるようになってしまって…」

「結構な人数取り巻きがいると？」

「はい…」

「その取り巻きがいるせいで男子生徒から話し掛けられる機会が皆無になり、必然的に男にどういう対応をすればいいのかわからなくなった、と」

「その通りです…」

成程、と退は納得した。

中性的な顔立ちに美しい白いショートヘア。スラリと高い身長に一目で分かる均等なバランスのとれたプロモーション。
スレンダーな美少女というのは正に彼女の事を言うのだろうと思える位だ。
その上ボクシング部部長な上にエース。
モテない理由が見当たらない。
これで性格がアレならばモテなかったかもしれないが彼女の場合は男と話している時以外は頼りになりそうな雰囲気がある。
しばし思案し退は口を開く。

「それで、真田さんはその苦手意識をどうしたいんだ？」

「そりゃ勿論直したいですよ。そうでないと相手にも失礼ですし…」

ふむ、と退は更に考える。
出来るなら寮父になる身として力になってあげたい。
しかし男に慣れさせるとしても必然男に関わる必要があるわけで。
一瞬理事長に協力を仰ごうと思ったがすぐ捨て置いた。
何故だか役に立つ気がしなかったのだ。
何故だろうか？

「（身近に誰か男の信用出来る人間がいれば良かったんだが…変人弓兵ならいるが一応女だ）」

さてどうしてあげたら良いものかと思考錯誤している最中、有紀はポツリと呟く。

「やはり誰か男と接してみなければいけないとは思うんだが、それが出来れば苦労はしていないか…」

「俺もそれは思っていたところだ。しかしそんな知り合いがいたならばこうはなっていなかったろうし…」

「そうですよね…ん？」

と、ここで有紀は一つの疑問を抱いた。
今自分が会話しているのは誰だったかということを。

「いました…そういう知り合い」

「ん？本当か？良かったじゃないか！」

「はい、何故か割りと話せるようになってしまっている気もしますけど」

「…ん？それってもしかして…」

ここで退も気付いた。
自分は今、男とのコミュニケーション不足な彼女と話せているという事実に。
そして悟った。自分が彼女の苦手意識を解消できるように付き合ってあげればいいのだということを。

「成程…真田さんの考えは分かったぞ。とりあえず会話という壁は超えていたわけで、更なるステップアップに俺は協力すればいいわけだ」

「理解が早くて助かります。となると次は何が出来るようにすべきなんでしょうか？」

「そうだな…敬語なくして名前呼び、とか？」

「よ、よし…それじゃあ…さ、さ…さささささ――――――！！」

有紀は意を決して言葉を紡…げない。
退の『さ』という頭文字を口にする度に頬が紅潮していく。
退はそんな有紀を微笑ましげに眺める。
まるでもう一人妹が増えたような気分だった。

「さがりゅしゃ…！…ぐぉおおおおお」

思い切り舌を噛む。
退は白を落ち着かせるときの要領で頭を撫でようとして、白ではないことを思い出し失礼だなと考え手を引く。
代わりに退は蹲って痛そうに口元を抑えている有紀の肩を叩き自分の方へ顔を向かせると、コツンと軽く有紀の額を小突いて優しく微笑んだ。

「ゆっくりいこう…な？」

有紀は突然額を小突かれて目を白黒させていたが、自分を落ち着かせるためにしてくれた行為なのだと気付くと、退に初めて笑顔を見せた。
歳相応の飾らない笑顔。

それはとても可愛らしく、きっと彼女が友人にも見せたことがないであろう代物。

退と有紀はお互いに少し、理解し合えた気がした。

その頃の寮待機組

「ゆかり…お腹空いたよ…」

「少し位我慢しなさ『ぐぅ〜』いよ…誰？」

「す、すまない。私だ…」

「はっはっは、皆腹ペコのようだね。それにしても有紀君も退君も遅いねえ…今僕らのお腹はきっと凹んでいるに違いない…コンドルの腹がヘコンドル…なーんっちゃって！」

「「「…」」」

「理事長」

「な、なんだい？主人君…」

「大概にしてください」

「はい…」

第四話　４月７日Ｐａｒｔ３（後書き）

退と有紀が少し仲良くなりました。
コミュでいうとＲａｎｋ１位かな。

まあでも今現在では退にコミュニティの力はありません。
むしろどうしようか迷ってます。
相当大変だろうしなあコミュ書くの

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1207z/

ペルソナ３なんとなく書いてみた

2012年1月13日17時54分発行